

中国留学報告書

浅野 友彦

中国。広大な国土と莫大な人口を持ち、地理的、歴史的観点から見ても日本と密接な関係にある国。これが以前までの私が持っていた中国に対する認識だ。世間一般としての常識や、教養の範囲内で言い表すとしたなら、このような至極当たり障りのない最大公約数的な認識が言うに易いだろう。しかし、もしも全く中国の事を知らないような人に中華人民共和国とはどのような国かを説明しなければならぬ場合に、この程度の認識ではまるで興味を持ってもらえないだろう。なぜなら、このような認識は単純な歴史やデータなどから読み取っただけのほんの表層上の認識でしかなく、データのみを語られたとして、さして興味が湧くものも無いからだ。日本にいる恐らく過半数の人々は中国に限った話ではなく、このような表層を読み取っただけの認識を持っているはずだ。だからと言ってそれは悪いことではないし、漠然としていても教養の一部として知っているだけでも意味はある。以前までの私はまさにその通りであり、中国に限らず外国に対して深く理解をしようとはしていなかった。しかし、今回の4か月の中国留学を経て、私の中での外国への認識が確かに変化したことを実感した。それを踏まえ、中国留学の報告を述べていこうと思う。

初めに、希望制である留学プログラムになぜ私が参加したかという点、それには少々複雑（主観）な背景があった。そもそも、私が新潟国際情報大学に入学した理由は、語学留学プログラムの存在によるところが大きい。しかし、私自身が留学プログラムに対して積極的ではなかった。入学の理由の一つに数えたように、現地へ留学して語学を学ぶという事がどれほど素晴らしい経験になる事かは誰の目にも明らかであり、そのことは私自身がよく理解していた。両親も留学プログラムへの参加に快く支援してくれることを私に語ってくれたこともあり、留学に行かない理由を探すことのほうが困難な状況下にあった。その状況で何故私が留学に対して積極的でなかったのかというと、人見知りの激しい私の性質が問題であった。日本人が相手であろうと、初対面の人間と円滑なコミュニケーションが取れる自信のない私が、外国人ましてや日本語が通じない初対面の人間と仲良くなれるだろうか。人によっては実に矮小な悩みだと感じるかと思うが、私にとっては死活問題ともいべき課題が常に頭をよぎっていたのだ。はっきり言ってこのような考えがどれほど愚昧で矮小であるかなどという事は痛いほどわかっていた。分かっているはいても、胸の中で葛藤が巻き起こり私の心を重くしていた。しかし、それでも踏み切ったのは、大学の先生方や先輩方の留学についてのお話だった。留学先での数々の体験談や学び得てきた事や彼らの楽しそうに語る姿にいつの間にか背中を押され、決断を下すことが出来たのだ。留学が終わった今にしてみれば、当時の私に蹴りを入れ、お話しをしてくださった方々にお礼をして回りたい気分と表現してもいいかもしれない。

中国留学の期間は4か月。長いようで短い中国留学で経験した事と言えば、日常生活で体験した小さなことから、旅行やイベントなど大きなことまで、いくら出不精で人見知りの

激しい私であっても数々の体験を得ることが出来た。その何もかもが新鮮で刺激的であり、日本には体験できないようなものばかりだった。観察すれば様々な点から、文化の違いというものが見受けられ、学ぶ事も多かったように思える。前置きが長くなってしまったが、これから私が留学で体験し、学んだことを述べていこうと思う。

留学が始まり、中国北京へ降り立って初めて抱いた感想は「変な匂い」だった。外国人観光客が日本に来るとまず初めに感じるのが「醤油くさい」「米を炊いたような気持ち悪いにおいがする」等、現地の日本人にとっては理解できない感想が出るとはよく聞いたものだが、まさにその逆パターンを体験したのだ。飛行機が着陸し、期待と不安を抱えた面持ちで一同飛行機を降りた。入国を済ませるためターミナル内を移動する際、明らかに日本のにおいではない匂いをその時私は感じた。到着が夜になり、さらに空港内という事もあって外の様子がよく見えず、外国に来たという実感が思いのほか湧かなかったのだが、その日本のものではない異質な匂いだけは私に、「ここはもうお前の国ではない」と言っている気がしたのだった。私たちが4か月の間生活していた北京には「中国の匂い」と形容するのがふさわしい空気に満ちていたが、その空気を感じたのは匂いだけでは無かった。まず乾燥していること、そして埃っぽいような感じがすることだ。当時の季節は夏だったが、日本の蒸し暑い夏と違い、空気が比較的乾燥していたこともあり、暑さはあるが幾分過ごしやすそうだなと感じた。しかし、空気がきれいではないという点ではその限りではない。日本でも度々ニュースになり、ほとんどの人が知っていると思う空気汚染の問題があるからだ。日本にいて、テレビや新聞のニュースで聞くのと、実際に体験し生活していくのでは脅威度が段違いだ。日によって空気が比較的きれいな日などはあるが、事北京に関しては基本的に青空は見えない状態が多く、ほとんどが曇りか霧の天気であった。空気汚染のひどい日は、少し広い程度の室内ですら薄ら霧が掛かるほどだ。私たちが生活していた学生寮の廊下もしばしば霧が掛かることもあった。それほどまでに深刻であるが、汚染された空気の所為で体調を悪くしたという人を聞かなかったのが幸いだった。私など、空気が汚く慣れない環境で体調を崩しやすいからと、うがい薬や風邪薬の類を念のため多く持ってきていたのだが、特に体調を崩すことも無くついぞ薬に頼ることは無かった。単なる杞憂だったのか、将又私の身体が丈夫だったのかは定かではないが、中国のものが私の体調に大きな影響を与えることが無く良かったと感じた。

続いて交通の違いを述べていこう。私が中国の交通事情で初めに驚いたのは、クラクションが日本とは比べものにならない回数聞こえることだ。中国に来るまでは、クラクションなど数回と聞いたか分からない程だったが、中国に来てからは日本では考えられない回数のクラクションを聞き、交通事情の違いをまざまざと実感させられることとなった。初めの数週間はみんな信号も渡れない程に、中国の交通ルールに驚いていたが、一か月二か月もするとほとんど中国に慣れ、一人で外出もお手の物となっていた。しかしそれでも、日本人からすれば危ないと感じることも多い。中国では普段からタクシーを使うのがポピュラーな点もさることながら、その運転も日本とは大きく違っている。日本と比べ運転がとても乱暴な

のだ。少し遠くへ外出をする際に割とみんなタクシーをよく利用していたのだが、助手席に乗り込むとその荒い運転にひやひやすることが多い。渋滞に少しでも隙間を見つけると事故がなんだと言わんばかりに割り込もうとアクセルを踏む。しかしそんなことがよく目撃される割には事故が起こったところを見たことがないのだ。そうそう起こる事ではないにしろ、そこには中国なりのマナーがあり、人々はそれを守っているだけであり、その意識に違いはないのだと学んだ。

次に生活について述べよう。私たちが住んでいた寮は二人一部屋で、日本人同士の部屋と外国人と相部屋の部屋があり、割合的には半々であった。私と同室は同年代のマレーシア人で、名前はユージン。彼は大学で4年間音楽を学ぶらしかった。マレーシアは多民族国家であり、マレー系、インド系、中華系の民族が主に暮らしている。公用語のマレーシア語のほかには中国語を話せる人は割といるらしく、彼は中国語が達者であった。彼も日本に興味があったので、お互い言葉や歌を教え合い、私に至っては授業で分からなかった箇所を彼に聞いたりした。授業を受ける時間帯が合わず基本的には夜から深夜にかけてしか話すことは無いが、陽気で親しみやすい彼の性格のおかげですっかり私たちは打ち解け、よく集まって遊んだものだ。生活リズムが合わないのは授業の関係でしようがないとして、ユージンの、人の私物を勝手に漁ったり借りたり、洗面台やトイレの使い方が汚かったりする点に対して私がいかに寛容でなかった所為もあり、看過できずに衝突することもあった。向こうからすれば私にも同様に何か許容できない点があったかもしれないが、お互い冷静に話し合えば回避できた衝突があったとも思う。留学中に迎えた彼の11月11日の誕生日には、日本ではポッキーの日とされ親しまれていることにちなんで大量のポッキーとブリッツをプレゼントしたり、おすすめの店を教えてもらって一緒に食事に行ったりすることもあった。しかし、友好的になれはしても、距離が近くなるほど言葉だけではない決定的な壁が存在し、どうしてもそれを避けて通れないのが異文化交流であり、楽しかったことやいらだったことすべてを踏まえてそれを痛感した4か月の相部屋生活だった。

最後に授業やそのほかについて述べよう。授業の開始は早い日は朝の8時に始まるので、朝の弱い私にはなかなかハードな毎日だったように思い出す。さらに授業は基本的にすべて中国語で行われ、たまに英語での説明が入るが、流暢な英語でサラッと流されてもそこまでの英語力は持ち合わせていないので多言語での説明は私にとって無意味に等しかった。そのため初めの内は、先生の喋っている内容に集中して耳を傾けて「話半分の半分」程度の理解がやっとであった。当然それではすぐに授業についていけなくなるので、出された宿題や予習復習は必要な作業となる。さらに、先生は積極的に外へ遊びに行くことを進めた。外に出で実際に中国語を使ってみる事、中国人の普段の中国語を聞き取り会話することが最も上達する手段だというのだ。忙しいなどは思っていたが、実際にその通りで、たくさん外出し、多くの交流を持つ人はみるみるうちに上達していった。もともと出不精な私にはハードルの高い作業ではあったが、友人の助けもあり一人で買い物や、さらには値切りも最高で半額程度までできるほど、コミュニケーションが取れるようになっていた。本と向き合うだ

けじゃできない事や見えないものがあると実感した気がした。

いささか大雑把ではないかと自分でも思うが、上記が、私が中国留学で得た経験だ。この留学生活の中で、政治的な話をするような場面は残念と言うべきか機会はなく、日本人だからと不当な扱いを受けることもなかった。そこで私は認識を改め、「国家は国民から成るが＝ではない」と気が付いた。おおつかみであった私の認識は裏を返せば偏見で構成されたイメージであった事に気づいたのだ。私がこの留学で経験し、学んだことは今後の大きな糧となるだろう。

私はこの留学を経て、中国への認識が変わったと冒頭で述べた。確かに実体験でないと語れないような体験をし、偏見まみれだった私の考えは柔軟になり、中国をただの「近くにある迷惑な国」などと言では語れなくなっている。私の中国に対する認識は変わったと言っていいだろう。しかし私が思うに、認識が変わる重大な要因は自分自身が変わることだと考える。私はこの留学で、自分で言うのは説得力に欠けるが変わったと自負している。中にはまるで変わってないと私を評価する人もいるが、少なくとも、留学に行くことをしり込みして下を向いていた以前の自分より、遠くが見えるようになったと言える。

最後に、私はこの留学に関わった人たちすべてに感謝している。私たちを支えてくれた国際情報大学の先生の方々、留学先でお世話になった北京師範大学の老師们には頭が下がる思いだ。そして、留学を考えている人たちにはぜひ思い切って踏み出してほしいと願っている。



